

## 「言葉のもつ力」

「心配ないですよ。」

この言葉は、私の参学の師である和尚さまから、度々掛けていただくお言葉です。

私は、人生の岐路に立たされた時に、自分の選択が間違っていないかどうかを確認しに、いつもその和尚さまにお尋ねします。

明らかに間違えていると思われる時には、厳しく言ってくださいますが、大概、「心配ないですよ。」と言ってくださいます。何を根拠に言ってくださいているのか尋ねても、「だいたいそういうことは当たるんですよ。」と濁され

山梨県 長泉寺住職 水庭浩章

ます。

よく、「信じる者は救われる」と言われますが、私も、その和尚さまのことを信じて、様々な決断をしてみました。実際にこれまでは、大体その和尚さまのおっしゃる通りになっています。

古代日本では、言葉に不思議な力が宿るという「言霊」が信じられてきましたが、私にとつて、その和尚さまの言葉には、不安を払拭できる、不思議な力があるように感じています。その和尚さまの言葉や表情には「安心」を与えるような温かみがあるんです。



そこで、今日は「言葉のもつ力」について考えてみたいと思います。

言葉は、人と人がコミュニケーションをとるうえで、非常に便利なものです。自分の思いや考えを伝える。相手の思いや考えを知る。そのうえで、言葉とは非常に重要な手段のひとつでしょう。

しかし、使い方を間違えると相手に不快な思いをさせてしまうこともあると思います。言葉遣いは「心遣い」とも言われるように、その人の人柄を表すともいわれています。皆さまも、人にかけてられた一言で、温かい気持ちになることもあれば、逆に、不快な思いをしたこともあると思います。

最近では、ソーシャルネットワーク、所謂「SNS」などの普及で、相手と顔を合わせなくても気軽に会話ができるようになってきました。しかし、そこに大きな落とし穴があります。そ

れは、自分が伝えようと思つて発信した文字を、受け取り手が違う解釈をしてしまうという問題です。そのようなことから、よく著名人の方がたたかれて、「SNSが炎上した」などと報道されることもよく目にします。すべてが誤解ということではないにしても、実際に自分の本意ではないように伝わってしまうことも多くあると思います。

同じ空間で顔を合わせての会話であれば、反応を見て補足することもできるし、表情や仕草で言葉を補うこともできますが、姿が見えない相手に対して、素早く簡単にコミュニケーションが取れるものですから、発信される言葉を多方面から確認するような時間もなく、自分本位の解釈になってしまうと思います。

また、一度発信してしまった言葉、口にしてしまった言葉は取り戻すことができません。ですから、言葉を扱うのには、正しい知識と冷静

さを持つ必要があります。

以前、修行僧が電話対応でお檀家様を酷く怒らせてしまったことがあります。その後、当時受付の責任者だった私が電話に代わって出たのですが、問題の解決には至りませんでした。「嫌だなあ、また叱られるのかなあ」と思いながらも、直ぐにそのお檀家様のお宅に伺つて、お詫びを申し上げ、事情を説明したところ、ご理解いただき、最後はお互いに笑顔でお話することができました。

やはり、電話で相手の顔が見えない状態で話すよりも、実際に会つて話をすることは、とても大事なことであると感じました。

だいぶ前のことになりましたが、インターネットで面白い記事を見つけました。

ある東京都内の居酒屋さんで「おい、生ビール」と頼むと一杯千円、「生ひとつ持つてきて」

で五百円、「すみません。生ひとつください」で三百八十円と、頼み方によって生ビール一杯の値段が変わるといふ貼り紙が店内に貼られているというものでした。

さらに、「お客様は神様ではありません。また、当店のスタッフはおお客様の奴隷ではありません。」とも書かれていました。

これは、そのお店を運営する会社の副社長さんが、以前にネットで話題になった「注文マナーによって値段が変わるフランスのカフェ」を、冗談を交えてまねたものだそうです。

実際に「おい、生ビール」で千円を請求したことはなく、定価の三百八十円で提供しているそうです。その副社長さんがおっしゃるには『「おい、生ビール」と言われたところで、特にビールの価格、質は変わりません。当社のスタッフがいともよりほんの少しだけ嫌な思いをするだけです。あくまでも当社のコンセプトのひ

とつである『売れることより、面白いこと』を表現したジョークツールのひとつです。今話題となっております貼り紙を『面白いね』と言ってくれるような方を、当社は大切にしていきたいと考えております」と記事には書かれていました。

貼り紙はジョークでしたが、言葉遣いひとつでお互いが気持ちよく過ごすことができる。とても考えさせられる記事でした。

私は、自分自身が「気が短い」性格であると自覚しています。なぜかというと、私はそのことによって多くの失敗を繰り返してきたからです。

その一つが、「言葉遣い」です。すぐに腹を立て、言葉遣いが荒くなり、相手に不快な思いをさせてしまったことも多くあると思います。皆さまも、そのようなご経験はありますでし



ようか。人は怒りをおぼえた時ほど、そのような行動をとってしまいがちです。

そもそも、なぜ人は「怒り」の感情をもってしまうのか。「怒り」の感情をもつことが悪いことなのか。「言葉のもつ力」を考えるうえで、切り離すことのできない「怒り」について、よくよく知っておく必要があると思いい調べてみました。

「怒り」とは、専門用語でいうと「防衛感情」というそうです。生き物は、敵が現れた時にアドレナリンを分泌することにより緊張、興奮状態にして、相手を襲うか逃げるかの究極の判断をする。その命令を体に下すのが「怒り」という感情。つまり、「生存本能」だということです。生存本能ですから、誰しもが持っているものであり、なくすことのできないものです。

しかし、怒りやすい人もいれば、全く怒ったところを見たことが無い人もいます。その違い

は何なのか。

それは、「怒り」に対する耐久差、ようするに、「怒り」をコントロールできるだけの容量を備えているのかどうかということでしょう。

実は、「怒り」というのは第二次感情というそうです。「怒り」を直接感じるのではなく、不安、憎しみ、焦り、嫉妬といった第一次感情が許容量を超えた時に「怒り」となって表れるのだそうです。

先ほどお話したように、「怒り」の感情は誰しもが持っているものだと思います。その感情を表に出すか、出さないかは、その時の精神状態に大きく左右されるでしょう。例えば、自分に自信がもてないとき、「不安」を抱いているときなどには、人は「怒り」易い状態にあると思います。

つまり、第一次感情が、自分自身が本当に感じて

情を感じないようにするためのまやかしの感情、不安を隠すためのダミー感情といえるでしょう。自分自身のことを振り返っても、心にゆとりがない時ほど「怒り」の感情を表に出してしまっています。

以前にもお話しましたですが、ある日、私が一人で托鉢をしているときに、お酒に酔った方からられました。

「あんた、こんなところに突っ立って何をしているんだ。」

私は少しムツとしましたが、穏やかな表情を作り「托鉢という修行をしています。」と答えました。

すると、その方が私の顔を覗き込むようにして、私の怒りの導火線に火をつける一言を言い放ちました。

「いいな、坊主は暇で。皆、齷齪汗あぐせくを流して

働いているのに、その必死で稼いだお金を、ただそこに突っ立って貰おうっていうんだから。何が坊さんだ、偉そうなことを言っているけど、やっていることは人として最低だな。」

その言葉を聴いた私の怒りは一気に大爆発、「あんたにそんなことを言われる筋合いはない。それに、私はただここに突っ立っている訳ではない。托鉢という修行をしているのだ。邪魔するんじゃない」と、公衆の面前で怒鳴り散らしました。

その酔っ払いも、怯むどころか更にエキサイト、壮絶な怒鳴り合いを繰り広げました。

そのうち、酔っ払いは飽きてしまったようで、自転車に乗ってどこかに行ってしまうました。

私は腹が立って腹が立って、帰りの道中もムカムカ、ムカムカ、お寺に戻ってからもムカムカ、ムカムカしておりました。

そのうち、腹を立ててしまった自分自身に対

して、「なんであのような対応をしたのだろう」と反省し、落ち込みました。

この頃の私を振り返ると、心にゆとりがなく、いつもイライラしていました。その大きな原因が、住職として預かったお寺にありました。もともと、自らの意思で住職になった訳でもなく、お寺の規模も小さいために収入がない。そのようなことから始めた托鉢でした。

そんな自分が置かれている環境への劣等感が募り、ものすごく卑屈になっていました。

将来のことを考えると、大きな「不安」に襲われ、夜もなかなか寝付けない日々を送っていました。

この件に限らず、この頃は「怒り」の感情を表に出してしまうことが多かったように記憶しています。お檀家さまと大喧嘩をしたこともありました。

恐らく、知らず知らずのうちに、人に不快な

思いをさせてしまったこともあったでしょう。今思えば、私はプライドが高すぎたのだと思います。自分が惨めだと思われること、傷つくことを恐れていました。それゆえに、第一次感情の許容量が極めて少なくなり、直ぐに「怒り」を表していました。

「怒り」の感情をコントロールできず、表に表すことにより、自分自身も不快な思いになりますし、他者に対しても不快な思いをさせてしまいます。一時の感情の爆発で、お互いに嫌な気持ちになる。そのような「怒り」はいいことなど一つもないですね。

しかし、人間の生存本能である「怒り」はすべて悪いことなのか。私にはどうしてもそうは思えないところがあります。

ニュースなどを見ていると、世の中「怒り」を覚えずにはいられないような事件がたくさん起こっています。人権を無視したような犯罪、

自らの欲望を満たすためだけに起こした事件の報道などを見ると、「怒り」が沸々と湧き上がってきます。

そのような「怒り」も悪い事なのか。

私は今、修行僧の指導役をさせていただいておりますが、時に厳しい言葉によって指導することもあります。私が修行僧だった頃も、厳しく叱られたことはたくさんありました。何故、そのような指導をするのか。それは、修行僧に対して立派な和尚になってほしいという思いから、時には厳しく指導をします。

私が住職をしておりますお寺の本尊様は、こ善光寺様と同じ「お不動様」です。お不動様は、忿怒の形相、怒りのお姿で、右手に煩惱を断ち切る剣をもち、左手には、衆生を救済する縄状の絹索をもっています。



私のお寺のお不動様も、それは、それは、怖いお顔をしています。しかし、お不動様の怒りの形相は、自分本位の「怒り」ではなく、人々を救済するための「怒り」です。人々が振り回され、苦しみの原因となつている煩惱を剣で切り裂き、欲望の赴くままに右往左往して、迷いの真つただ中にいる人々を、羂索をもつて手練り寄せ、真実の幸せに目覚めさせます。お不動様の「怒り」は、慈悲のお姿なのです。

私が修行僧の時、あるご老師の身の回りのお世話をさせていただく役を約一年半務めさせていただきました。そのご老師は、とても厳しい方で、最初のころは毎日のように叱られていました。その怒っているお顔は、正に「お不動様」そのものでした。

どのようなことで叱られたかという、返事が小さい時、キビキビ動かない時、もたもたしている時など、殆どが些細なことでした。

時には、その「怒り」を、理不尽に感じることもありました。

ある日、お部屋にいらつしゃつたご老師が、「おい」と私を呼びました。私は「ハイ」と大きな返事をしながらお部屋に伺いました。すると、ご老師が、「あゝゝゝ、をもつてこい」とおっしゃいました。「あゝゝゝ」と申しましたが、少し訛りのあるご老師の言葉が、うまく聞き取れませんでした。

そこで、私は「申し訳ございません。今一度お願いします。」というと、「同じことを何度も言わせるな。しっかりと聞いとけ」と怒鳴られました。

その数日後、同じように「あゝゝゝ、をもつてこい」と言われました。その時も、ご老師の言葉を聞き取れなかつたのですが、聞き直すとまたすごい剣幕で叱られると思ひ、「ハイ」と大きな返事をして部屋の外に出ました。返事はし



たものの、何をもっていくべきなのかという肝心なことが分かっています。これのことかなというものを恐る恐るもっていくと、はずれでした。

「お前は何をやつてんだ。分からなかつたら聞き直せ」と怒鳴られました。

要するに、聞き直しても叱られるし、聞き直さなくても叱られる。どちらにしても避けられないということです。

毎日毎日叱られ続け、時には逃げ出したくなったり、やり返してやろうと思ったことも一度や二度ではありませんでした。ご老師の顔を見るのも嫌で、本当に毎日が苦痛でした。

しかし、自分の感情を爆発させてしまったらすべてが終わってしまうと思い、歯を食いしばって修行生活を送っていました。

その後、半年、一年と経つにつれ、徐々に叱られる回数が減ってきました。

その理由は、ご老師が必要としているものを、求めているものを、ご老師が言葉を発する前に準備できるようになってきたからです。叱られる続けることによつて、自然と身についてきました。

今思えば、このことは非常にありがたいことです。人が求めていることを考え、言われる前にその期待に応えようとする。それまでの私にはなかつた考えです。いつでも自分が中心で、自分に都合がいい事ばかりを考えていたからです。

しかし、当時の私は二十代、ご老師のありがたさに気付かず、ご老師から離れ、お暇することを決めました。その思いをご老師に告げると、案の定ものすごく叱られました。それから、また苦痛の日々の始まりです。毎日のように「いま帰ってどうするんだ」とか「それで修行ができたつもりか」などという言葉を浴びせ続けら

れました。

それでも、私が帰りたい一心でいると、漸くご老師も、納得はしてくださらなかったと思いますが、帰ることを認めてくださいました。その時、うれしい気持ちと同時に、何かとても寂しい気持ちにもなりました。

いよいよ修行道場をお暇する日が近づいたとき、ご老師からこんなことを言われました。

「いいか、帰つてからよそのお寺に手伝いに行くときには、少なくとも五年間は、誰よりも早くそのお寺に行つて準備をして、誰よりも遅くまで片づけを手伝うようにしろ。」と。それから最後に力強いお声で「謙虚でいることを忘れるな」と言われました。

私は、出来る限り、ご老師に言われたことを守るようにつとめました。

振り返ってみると、今の自分があるのは、

ご老師の影響なしには考えられません。ご老師のもとを離れて二十年が経ちますが、その間、いろいろな方に助けていただきながら今日まで過ごせてきました。そのことをよくよく考えてみると、ご老師に言われたことを実践することにより、多くの方々が認めてくださり、困っているときに手を差し伸べてくださいました。

法要のお手伝いに行つたときには、細かなところまで準備を心掛け、片付ける時には元通りにする。そのことが自然とできるのも、ご老師に叱られ続けて養つた修行の賜物だと思つていきます。

また、人の忠告を嫌がらず、素直に聴けるようになつたのもご老師のお陰です。そのことにより、いろいろな方に可愛がついていただきました。私が間違えた方向に進みそうなきには、正してくださいる方もいらつしやいます。ご老師のお陰で、本当に素晴らしい人との出会いに恵

まれたと思つています。参学の師匠との出会いも、ご老師の存在がなければ、今のような関係は築けなかつたと思います。

間違いなく、私の和尚としての基盤を創つてくださいました。私にとつてご老師は「お不動様」そのものでした。

江戸時代の曹洞宗の和尚さんで、天巖祖暁という方がこんな詩を残されています。

幾たびか、いくたびか、打着に逢うてたぢやくにお旧瘡班たり  
往時を追憶すれば、おうしをついおく毛骨寒しもうこつさむ  
快活は、かいかつ当に痛処より得べしまさにつうしよ  
即今翻つて恨む、そこんひるがえ棒頭の寛なりしことをぼうとうのかん

祖暁和尚のお師匠様はとても厳しい方だったのでしよう。そのお師匠様には、幾たびか厳しく打たれたことがあり、その時の傷跡は今でも

斑に残っている。その時のことを思うと身の毛もよだつ思いで、今でも寒気を憶える。

しかし、そこで転句。今の充実した快活な思いは、まさにその痛みから感じることができる。今、翻って恨む。何に対して恨むのか？「棒頭の寛なりしことを」、もつと打ってくればよかつたのにと。なかなか言えることばではないですね。

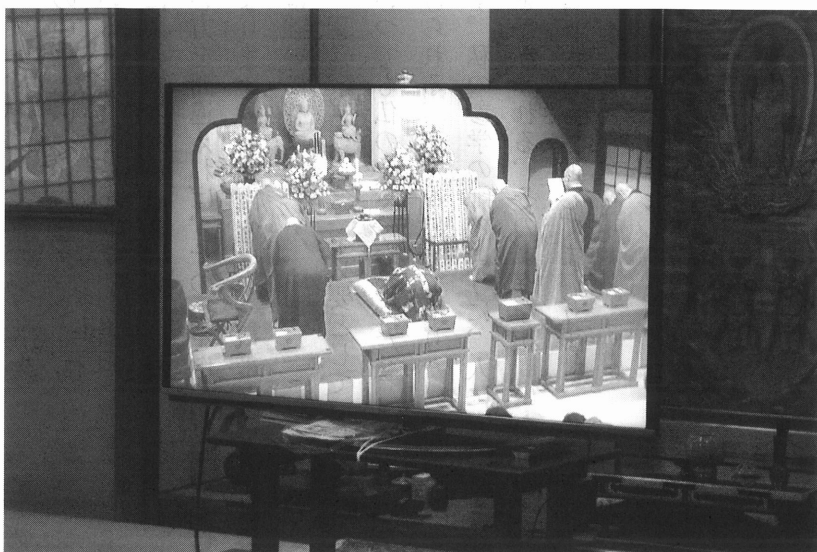
お師匠様の厳しさがあって、今の自分がある。祖暁和尚は決してお師匠様を恨んではいません。ものすごくお師匠様に感謝していることが、この詩偈から窺い知ることができます。

私のご老師に対する思いも同様です。当時は叱られ続けてとても辛い思いをしました。当時、叱られたことは今でも鮮明に覚えています。しかし、今の充実した自分自身があるのは間違いなくご老師のお陰です。振り返ってみれば、感謝せずにはいられません。

今の時代、祖暁和尚の詩にあるように、厳しく棒で打つようなことはあつてはなりません。その人のことを思い、時に厳しい言葉をかけることもあると思います。

だからと言って、その人のことを思えば、誰にでも叱っていいということではありません。十人十色、人それぞれです。自分の価値観が、万人に当てはまるわけではないのです。中には、厳しい言葉をかけられることによって自信をなくしてしまう人もいます。一歩間違えれば、言葉の暴力にもなりかねません。そのの見極めをしつかりして、よくよく考えて言葉を発することが大事です。

また、人を叱るといふことは、その人に嫌われることもあるでしょう。時には、逆切れして喧嘩になることもあると思います。そのようなリスクがあることを自覚して、それなりの信念と覚悟をもって言葉を発しなければなりません。



大本山永平寺御開山の道元禪師様は、

「自分で思う事も、言う事も、自分でも気が付かないところで悪い事もあるのだから、まず仏の教えにかなっているのかどうかを省みて、また、自分や他人のためになるかどうかをよくよく反省して、ためになるようならば行いもし、言いもすべきである。」

とお示しになられています。

いま、その言葉を発することが正しい行いなのか、本当にその人の為になるのか、よくよく反省し、慎重に行動していくことが必要です。

優しい言葉をかけるのにも、厳しい言葉をかけるのにも、自分の価値観を押し付けるのではなく、冷静で安定した、客観的な視点を常に持たなくてはなりません。

いつ、どこで、何があるかわからないこの世の中において、「言葉のもつ力」を必要としている人はたくさんいます。その「言葉のもつ力」によって救われる人は必ずいます。しかし、使い方を間違えれば、その人を傷つけることにもなります。それほどに、「言葉」のもつ影響力は強いのです。

「言葉のもつ力」を必要としている人たちに、いつでも仏の教えにかなった慈しみの言葉かけられる、そんな自分でありたいと思っています。私の参学の師のように、人に安心や温かさを与えられる、そのような和尚になれるように、これからも精進してまいります。

